
君に伝えたい事

彌劔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君に伝えたい事

【Nコード】

N0826C

【作者名】

彌鋳

【あらすじ】

知哉とある少女そしてこの行方は…

第一話（前書き）

三日月夜をがいまいちな人に

第一話

俺

専門生の俺は現在一年だ。君とは小学校から高校まで一緒だったよ。

あれからもう5ヶ月になっても君の事で忘れない。高校で伝えておきたいけど…言えなかった。

俺は他の人と違う、どじだしとろくさいし、何やつても失敗ばかり。けどね、そんな俺は取り柄は一つあるよ。約束は絶対守ると…

私

私は貴方の事ずーと世話してた。小学校から高校までね。貴方と違って成績やスポーツ得意な訳で学校でのアイドル的な存在だった。

そんな私から貴方は疎外間を感じていた。誰にも話かけらずに。そんな貴方は相談する相手は先生と私だけだった。でも貴方は先生や私のアドバイスを約束だと思って約束を果たした。あの時の私は嬉しかった。

そんなある時だった。『おーい知哉、何かさ最近綺麗な女の人見たよ。』

俺は『はあ、今時にそんな人見掛けんぞ。』親友の浩平は嘘を着いて居なかった。『だったら見に行つて見ろよ。』と浩平は言った。

『…!!まさか偶然なのか。いあメールもしてないのに、いきなりこっちに現れるなんて』と知哉は言った。『どうだった?』

と浩平は聞いてきた。『なんつつか。幼馴染みがいきなり来て驚いた。』と言った。

『え。あれお前の幼馴染みかよ。』と驚いた浩平だった。しかし、俺は君にまだ言い伝えてないというか、言い出す勇気がないのだ。

第二話（前書き）

主人公知哉と百合菜の関係は複雑な関係しかし二人は誰とも付き合
って無いのにどちらも気を遣っていた。

第二話

俺

ああ、昨日は君の姿を見たよ。でもまだ言う勇氣ない。だって俺今でも君に彼氏いるかいなかで不安だから…

私

昨日ね。貴方の姿を見たよ。それでも、声かけずらかった。だって貴方に彼女いるか不安なもの。俺

あ、でも君の好きだけどこれだけ言えるよ。高校の卒業の時桜の木に残した言葉だ。俺と君は見えない愛の絆で結ばれると。

私

私は貴方に気を遣ってるかと思ったよ。ねえ高校の事覚えている？高校の卒業の時貴方が私を呼んで、桜の木に刻んだ言葉。そう私と貴方は見えない愛の絆で結ばれている。

そしてある日二人にはそれぞれの道がある。『なあ、知哉。お前さ就職何にする。』と浩平が聞いてきた。

『俺か？んー小説家かルポライターやるかなあと思ってる。』『ルポライターってあちこち回って写真をとって自身のホームページに載せる奴だろ。』

『そだよ。俺はノートパソコンあるし。カメラだってあるから大丈夫だよ。』

『まあ、それなら言う必要無いか。まあ頑張れ。』と浩平は俺に言った。

『ああ頑張るよ。ルポライターなら彼女に届かない思いを届けれると思う』『ねえ、百合菜って将来どうすんの？』

友達の姜が聞いてきた。

『私は、カメラライターになるかなあと思う』

『ふーん、頑張つてね』『うーん、カメラがないだよ。デシタルのが。』

『だったらあの人に頼めば。』と姜がいった。

『あの人ね。有るけど。また嫌われそうかも…』と百合菜が不安な顔で言った。そう彼（知哉）に嫌われそうかもしれない。

第三話（前書き）

二人の再会そして二人の休日の出来事。まだまだ二人の思いは決意
はしてはいなかった

第三話

俺

今日は祝日だ。なにもやることがない。だから外に出た。かと言って何もやる事無いのに懐かしい公園にきた。そこは君と初めて会った場所…

私

今日は祝日、外出してどつかで暇潰し目的で公園にきた。ここは貴方と会った場所だった

そんな二人が再会した。『…！！百合菜』

と知哉がでびつくりで起き上がった。『ふふ。久しぶりね。こうして貴方と会うのは3ヶ月ぶりだね。』と百合菜は言った。『ああ、かれこれ、3ヶ月ぶりだな。』

『まあ知哉は変わって無いね。』と百合菜は笑っていった。

『ふつ。まあな、これでも百合菜に見付けやすいように変わらないようにしたけど。で百合菜は彼氏とかいるのか？』と知哉は百合菜に聞いた。

『いないよ。そうゆう知哉はいるの？』と聞き返した。

『俺か？いないな。もてないからな。』と言った。そして、二人ともはホッとした。

そして、知哉はある事を告げた。

『百合菜、あの卒業の事覚えてる？』と訪ねた。

『覚えてるよ。3ヶ月立ってまたあの桜の木に行くという事でしょ。』

『

『ああ、そうだよ。二人であの約束の場所へ行こうそして、昔の事や今の事を語ろう。』

百合菜は『そだね。明日行こう。約束の場所にそして昔見たく笑ったり泣いたりしながら語ろう』

二人の時間はまだまだある。そうあの日からの続きだから。

（俺は百合菜に合わせなきゃいけない。何もかも）
と知哉決意を胸の中で誓った。

（明日か。やっぱ私は知哉を見て一瞬分かった。私と合わせてるだつて）百合菜は薄々気づいていた。

二人の時間はまだまだある。そうあの日からの続きだから。

（俺は百合菜に合わせなきゃいけない。何もかも）
と知哉決意を胸の中で誓った。

（明日か。やっぱ私は知哉を見て一瞬分かった。私と合わせてるだつて）百合菜は薄々気づいていた。

最終話（前書き）

短いけど。これにて君伝えたい事は終了です。

最終話

俺

ついに来た待ち合わせの日そして言わなきゃいけない事がだから言おう。自信は無いが言わなきゃ損するかもしれない。

私

ついに来ちゃった。待ち合わせの日だね。私は何から話せば良いのか分からないけど貴方も何かを話そうと決意あるんだよね。だから私も全部話すよ。

その二人が桜の木まで来た。早く来たのは知哉だった。『…言わなきゃ損はするよな。』と不安な顔をして言ってる。そして5分後百合菜も到着した。『はあはあ、お待たせ』

百合菜は走って来たから疲れた表情で言った。『まあ、まず息整えてくれ』と知哉は言った。そして10分後『なあ、百合菜：俺さ前から言いたい事有るんだよ。聞いてくれるか』

『私も言いたい事有るから先に言って』

と百合菜は言った。

『分かった。…改まってだけど俺百合菜と別れて3ヶ月立った。でも昔と気持ちちは変わらない。だから俺と一緒に居てくれるか？』

と知哉は言った。

『分かったよ。私もね、知哉と離れてから3ヶ月立った私も気持ちちは変わらないままだった。そして今こうして二人で居るからずーと私を守ってくれる？』と百合菜は言った。

『うん守ってやるよ。これからもこの先もずーと君を守ってやるよ』と知哉は言った。

そしてあの二人は強い絆で結ばれていた。そう二人が書いた日記それこそ二人の愛の絆だからだから二人はこう言う。『それは永遠の愛』と言う。

『俺達の愛は誰にも切れない絆だから』

『私達の愛の絆は誰にも壊されないそう強く結ばれて居るから』
と二人は強い愛の絆で結ばれているのだから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0826c/>

君に伝えたい事

2010年10月9日21時14分発行